土木学会インフラマネジメント技術国際展開研究助成 中間報告

液状化に起因する長距離地盤流動により 被災したインフラ施設の復旧と対策



東京大学生産技術研究所 清田 隆

愛媛大学: 岡村未対・小野耕平 九州大学: ハザリカ ヘマンタ 八千代エンジニヤリング: 古市久士



長距離地盤流動の概要

 Mw 7.5(Depth 10km)、左横ずれ断層
地すべりは東西の山脈に挟まれた幅約 10kmの沖積低地(扇状地)で発生



<u>地すべり面積と被害家屋数</u>

Balaroa 0.39km² (930 houses) Petobo 1.63km² (1255 houses) Jono Oge 1.75km² (238 houses) Sibalaya 0.5km² (unknown)

◆ 僅か1~4%程度の地表面勾配にも 関わらず数百m以上の地盤流動



研究の背景・目的



研究の目的

長距離地盤流動の要因として、被圧地下水の存在が考えられるが、具体的な発生機構は未解明

〇発生メカニズムの解明「灌漑用水路の影響」〇対策の方針

地震前の斜面勾配: 2~3% (1~2 deg), 流 動斜面上部に灌漑用水路があり、大きな被 害を受けた。





UAV測量を用いた流動前後の地形変化





Distance from irrigation channel (m)

現地ヒアリング調査

▶ 灌漑用水路の建設は1980年代。建設後から下流域では地下水位が上昇した。



長距離地盤流動の想定メカニズム



Top soil (clay/silt)



Mechanism 4 被圧地下水の流入







地震からーか月後の様子(動画) 表層地盤は依然として泥水に近い.

室内土質試験

液状化した後の強度変形特性(メカニズム1)



浸透流解析(東西二次元断面)



灌漑水路建設前後及び地震前後の水位変化



まとめと今後の予定

◆現場調査、UAV測量等 地盤流動の形態を把握。トレンチ調査により、流動層厚も推定された

◆現地ヒアリング調査

<mark>灌漑用水路建設の影響、および地盤流動時の様子</mark>に関する情報が得ら れた。(地盤の隆起・地すべり上部での噴水、灌漑用水路の決壊タイミン グ等)

◆室内土質試験(大ひずみ中空ねじり試験) 表層地盤の液状化だけでは、その長距離流動を説明できない。<mark>被圧地</mark> 下水の流入を考慮すると、非常に緩傾斜地盤でも流動する。

◆浸透流解析

灌漑用水路の建設により、用水路の直下では地下水位が1~3m程度 上昇する。全体の地下水環境に与える影響は大きくない

◆今後の予定 全体的に断片的な情報しかなく、解析モデルも改善が必要。 微動探査・表面波探査・サンプリング試料による室内試験を実施し、地層 構造・解析パラメータの精査、流動発生メカニズムの裏付けと、対策工法 の検討(灌漑用水路の構造を含む)